

## ハイデルベルク信仰問答講解説教6「救いの啓示」(2011年9月11日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起す。王は治め、栄え／この国に正義と恵みの業を行う。彼の代にユダは救われ／イスラエルは安らかに住む。彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。(エレミヤ23：5-6)

神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。御子は、天使たちより優れた者となりました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。(ヘブライ1：1-4)

## 【説教】

今日は、第六主日、問16-19のところ聞いてまいりますが、その前に少し前のところからの流れを確認したいと思います。

ハイデルベルク信仰問答は、三部構成になっておりますが、その第一部では人間の悲慘さ、人間の罪の問題が明らかにされました。それは神さまと人を愛することに完全に破れている人間の罪の現実であります。問5では「わたしは神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている」とさへ述べています。いやいやそんなに悪くない。多少の好き嫌いはあったとしても憎むことまではしないと考える人が多いのではないのでしょうか。信仰問答は少し人間の罪について大げさでしょうか。

今日9月11日は、皆さんの記憶にもまだまだ鮮烈に残っていると思いますが、2001年9月11日、アメリカで起こった同時多発テロからちょうど10年という日になりました。確か、夕食後でしたらが祈禱会の準備しようとして書斎に入りましたら、テレビから突然その映像が飛び込んできて、これは大変なことが起こったと思いました。その日はなかなか寝付けなかったことを覚えています。翌日の祈禱会でもそのことを覚えて祈りました。

9.11後のことは皆さんもよくご存知のように、アメリカは報復として対テロ戦争に踏み切ります。まずアフガニスタンへの戦闘を開始しました。そしてそれがやがてイラク戦争へと発展していきます。今年の5月にビンラディンがアメリカ軍の特殊部隊によって殺害され、オバマ大統領は「正義が行われた」と演説しました。アメリカは、当時のブッシュ大統領以来、この一連の戦争を「正義対悪」の対決として正義である自分たちが悪をやっつけるという二極化、単純化の中で肯定していきま

す。しかしその正義であるアメリカは、民間人を攻撃し、またそれを誤爆であるごまかし、更には多くの捕虜を虐待し、死に追いやった。あのニューヨークで引き起こされた同じ惨劇が、アフガニスタンやイラクでも繰り返されたのです。もはや悪魔に支配されているとしか言えないような蛮行をイラクのアブグレイブ刑務所で、キューバのグエンタナモ収容所でアメリカも行ったのである。つまり何が正義かということです。この人間のどこに正義があるのか。テロ10年の軌跡を振り返る中で、そのことを世界は真摯に受け止めてはならない。そして人間は、自分を正義とすることの恐ろしさを知らなくてはならない。その中で人間は罪を犯すのです。テロを起こしたイスラム原理主義組織もまたこの戦争を「聖戦」と位置づけて、自分たちの信仰にかけて正義のために彼らもまたテロを繰り返すのです。正義と信じていますから罪の自覚がありません。このエゴイズムこそわたしたちを罪に誘う最も巧妙な悪魔のわなであります。正義という名のもとで人間はますます怒りや憎しみを増幅させ、罪を重ねてまいります。

そしてこのことは、別世界の話ではなく、まさにわたしたちの現実であります。家族の関係、職場の関係、教会の交わり、悪魔は巧妙にこのエゴイズムのわなをしかけてきます。自分の正しさの中で相手を裁き、赦せないと思う時、わたしたちは間違いなくこの悪魔のわなに墮ちているのです。その中でわたしたちは神さまと隣人を憎む方へ間違いなく転落している。

思い立って、あのテロの後の最初の日曜日の説教を探してみました。あの頃は都城の教会で世界共通の聖書日課を用いて毎週説教を行っておりましたが、その日の説教がマタイ18：21以下、主イエスがペトロに「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」と言われたところでした。自分は主人に赦されておきながら、仲間を赦せない家来の話を読んで、まさに世界が憎しみを増幅させていた時に、世界中でこの赦しの御言葉を聞くことに神さまの導きを強く感じた思いがしました。しかしわたしたちはこの神さまの赦し、その恵みをすぐに忘れてしまう。そしてただ自分の正しさだけで生きてしまうのです。そこに人間の罪のしつこさがあります。わたしたちはこの罪ゆえに神さまから裁かれなくてははいけません。この罪から救われるにはどうしたらよいのでしょうか。これは切実なことであります。

そこでハイデルベルク信仰問答では、この罪から救われ、神さまの裁きを逃れるためには、何よりもこの罪を償うものがなければならぬと答えます。そしてそれには真の仲保者、救い主が必要であるということです。「仲保者」とは「仲立ちをする者」「橋渡し役」であります。つまり神さまと人間との間に立って、わたしたちを神さまの前にとりなし、罪を償い、和解を取り付ける存在が必要なのです。それが先週読んだところ、問15で言われていました。

さて、ここに「まことの、ただしい人間」であると同時に「まことの神」でもあられるお方とあります。このことが今日の説教の一つの主題となります。何故にその仲保者が「まことのただしい人間」であり「まことの神」である必要があるのか。またそれを満たしているお方は誰かということです。問16-17を読みます。

罪の問題は、人間自身の問題です。だからそれを他の被造物が担うことは本来できません。その責任はどこまでも人間が負わなければならない。人間がきちんと始末する。しかし、人間がその責任を本当に負えるかと言えば、問13にあったように人間は、自分自身では償いをするのができない。それどころか日毎にその負債を増し加えているのであります。不完全な者が不完全な者を救うことなどできない。以前から溺れている人のたえを使いますが、自分が溺れているのに、他の溺れている人を助けることなどできないのです。助けるためには、溺れていない人が助けに入るしかありません。罪に溺れていない人、つまりただしい人であり、かつまことの人間として、その罪の責任を負うという立場でなければなりません。

でもそれだけではいけません。そのただしい人間もまた人間である以上は、罪に負けて一緒に溺れてしまう可能性があります。そこに人間の弱さがあります。ですからその罪に打ち勝つ力をもっていなければならないのです。更には、その罪に溺れている人を助けなければなりませんから、罪から救う能力を持っている方でなければなりません。問14にあったように「罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、かつ他のものをそこから救う」という存在でなければならない。そういう存在はこの被造物にはない。ですからそれはまことの神さまである必要があるのです。神さまの力がそこに働かなくてはならないのです。

そのような存在があるのか。あるのです。その答えが問18です。それはまことの人間として、わたしたちの罪を償う立場であること、かつまことの神としてその罪からわたしたちを救い出す力を持つお方であるということです。それがイエス・キリスト。

イエス・キリストについての、この「まことの神であり、まことの人」という表現は、キリスト教教理の形成において重要な表現となりました。教理というのは、救いの筋道のことですが、何よりイエス・キリストはどのようなお方であるかが、救いの筋道を決定づける鍵となることなのです。ですからそのことを巡って、教会は多くの論争を経て、その教理を確立してまいりました。この教会でも以前学んだことがあります。ニカイア信条という信仰告白があります。その信条が作られた背景には、イエス・キリストの理解を巡る激しい論争がありました。アリウス・アタナシウス論争、別名三一論争とも呼ばれるものです。一言で言えば、イエスをまことの神とするかどうかの論争です。アリウスは、イエスは限りなく神に近いけれども神ではない、人間であるという主張をしました。それに対してアタナシウスは、イエスはまことの神であるという主張をします。紆余曲折ありますが、最終的にはこのアタナシウスの主張が認められニカイア信条が制定されます。そのニカイア信条では、イエス・キリストについて次のように告白します。「主は神の御独り子、よろず世に先立って、御父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、造られずして生まれ、御父と同質にして、万物は主にあってなれり」そしてその真の神さまが「われらの救いのために天より下り、聖霊により、おとめマリヤより肉体をとり、人となり」と告白します。まことの神さまが骨肉され、まことの人となられる。この教理が確立されて、主イエスの仲保者としての働きがわたしたちの救いに不可欠であることが明らかにされました。この信仰は今日も変わることなく教会の信仰として受け継がれています。

でも、ここである疑問を感じる人もおられるかもしれません。この教理が確立されたから、主イエスの救いが定まったのか。それなら救いは後の教会が考えて作り出したものになるのではないのか。その疑問に対して信仰問答は問19で答えます。

主イエスが、救い主、仲保者であり、まことの神さまであり、まことの人間であるという教理を教会は何によって知ったのか。後で教会が考え出したのか。そうではない。それは聖なる福音、つまり聖書そのものがそれを証している。聖書がそのことをすべてに先立って明らかにしている。

ここで今日の説教の二つ目の主題ですが、それは福音の啓示ということですが。「福音」という言葉は、「喜びの知らせ」という意味です。主に教会が福音と言う場合、それは特に新約聖書の福音書、その中でも主イエスの十字架と復活の御業のこと、それによる罪の赦しのことを指しますが、ここで注意していただきたいのは、信仰問答は、この福音を「楽園」つまりエデンの園に見出し、族長たちや預言者たち、更には律法による犠牲や儀式、これらはすべて旧約聖書のことを指していますが、そこからすでに福音を位置づけているということです。では、本当に旧約聖書に福音があるのか。

例えば、創世記の楽園において、どこに福音が示されているのか。ここで信仰問答が挙げている聖書箇所は、創世記3:1

5です。そこには「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」とあります。お前というのは蛇のこと、蛇はサタンの象徴です。その蛇の頭を女の子孫が砕く。これは古来、罪とキリストとの対決を意味したと理解されてきました。ここに福音が予見されているというわけです。

また族長たちと言えば、アブラハムを思い起こすでしょう。創世記22:18「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る」とあります。アブラハムの子孫に与えられる祝福、人類はアブラハムの子孫としてお生まれになられたまことの人イエス・キリストを通して神さまの祝福を得るものとされたのです。ここにも福音が予見されている。

預言者たちとあります。今日はエレミヤ書を読みました。こども信仰問答が挙げている御言葉です。この「正しい若枝」こそイエス・キリストのことと理解されます。しかも「彼の名は主は我らの救い」と呼ばれる。イエスは、ヘブライ語ではヨシユアのことです。それは「主は我が救い」という意味なのです。ここでもキリストが予告されている。そのように旧約聖書からすでに福音が始まっているのです。

わたくしは、神学校時代は聖書学、その中でも旧約聖書学を専攻しておりましたが、わたくしが在学中に亡くなりました左近潔という世界的な旧約学者がおりました。その先生に一年だけ教わることができました。その左近先生が繰り返し、旧約聖書からも福音は語れるということをおっしゃっていたことを思い出します。当時はその意味がよく分かりませんでした。今はよく分かります。つまり聖書全体が福音であり、イエス・キリストを指し示している。まさにこのハイデルベルク信仰問答に言われていることを左近先生は言われていたのだと思います。

わたしたちの教会では、礼拝の中で聖書を読みます時に、必ず旧約聖書と新約聖書の二つを読みます。旧約聖書はその福音を予見しており、新約聖書はまさにその成就として語られます。このいにしへの時代からの福音はまさにイエス・キリストによって成就されました。神さまの救いの啓示はイエス・キリストによって明らかにされた。ヘブライ人の手紙もそのことを証しております。「神はかつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」と。そのように聖書全体が一人のお方、イエス・キリストに向かって集中しているのです。

「啓示」というのは、神さまが御自身を明らかにしてくださいという意味です。わたしたちは自分で神さまの存在を探求し、これを明らかにしていくのではない。人間は神さまのことを自ら探求して知ることはできない。知ることを許されるただ一つの道は、この聖書であり、この聖書全体が証しているイエス・キリストを通してのみ、知ることができる。そのように神さまは御自分からわたしたちにその救いを明らかにしてくださいののです。そのように神さまは御自分からその救いを明らかにしてくださいののです。ある神学者が、この信仰問答の解説の中で、わたしたちに罪の償いを「要求する神が、恵み深くも自分から答えを出された」と言います。恵み深くも神さまは御自分からわたしたちにこの聖なる福音を掲示され、救いを明らかにされました。それがイエス・キリストです。この神さまから与えられる確かな救いの啓示によって、わたしたちは今、神さまの恵みの中にあることを喜ぶことができるのです。お祈りをいたしましょう。

天の父。罪の中にあつて、あなたを知るこののできないわたしたちです。しかしあなたは御自分から、聖なる福音をとおして、聖書を通して、その救いを見せてくださいました。そしてまことの神であり、まことの人であるイエス・キリストを通して、この聖なる福音をはっきりとお示しくださったことを感謝します。どうかあなたがお示しくださるこの福音によって、わたしたちがあなたの救いに招かれ生かされていることの恵みを日々

感じつつ、感謝して歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。